

# 第1章

## 技法開発の背景



## 第 1 章 技法開発の背景

障害者職業総合センター職業センター（以下「職業センター」という。）では、高次脳機能障害者の就職、雇用の安定及び復職に資するため、高次脳機能障害者に対する支援プログラム（以下「支援プログラム」という。）を実施しています。

支援プログラムにおいては、高次脳機能障害者の自己理解の促進、補完手段の習得及び事業主支援を目的とした技法の開発等を行なうとともに、地域障害者職業センター（以下「地域センター」という。）等で実施する高次脳機能障害に対する就労支援に資するため、その開発成果の伝達・普及を行っています。

### 1 技法開発の背景

支援技法の開発にあたり、令和 5 (2023) 年度に地域センターを対象とした支援技法の開発ニーズ等に関するヒアリング調査を実施したところ、「自己理解や病識の乏しさのある高次脳機能障害者への効果的な支援方法が知りたい」「自己理解を深めるための支援技法を開発してほしい」等、高次脳機能障害と診断され、就職や復職、職場定着等に向け何らかの支援を希望する者（以下「本人」という。）の自己理解に関する課題へのアプローチに難しさを感じるという意見が挙げられました。このような意見が挙がる理由の一つとして、家庭や職場、支援場面等で、高次脳機能障害者にかかわる周囲の人は困っていても、本人には困り感が乏しく、自分の課題と捉えていないことが挙げられます。このような状況のままだと失敗を繰り返したり、周囲との関係に影響が出る等社会適応上の困難につながりやすいと考えられます。支援者は、この状況を改善し、補完手段の獲得や支援の活用等課題の解決に向けた取組につなげるために、本人が周囲の困り感を理解し、自分の課題として受け止める（受容する）よう促します。

一方、高次脳機能障害は認知機能の低下が生じる障害であり、自身の状況を認知することの難しさが伴います。また、受障後、自分のことを知る機会（経験）が積まれていなかったり、経験があっても受障前の自己像が強く残っていることや認知機能の低下により、障害の症状や課題の自覚が難しい場合が少なくありません。その際、支援者が無理に自己理解を深めようとアプローチを図ることで、本人との信頼関係が構築できず支援が途切れてしまったり、本人の心理的な負荷を高め、症状悪化につながることも危惧されます。

そこで、本実践報告書では、高次脳機能障害者の状況に応じて、自己理解の程度を柔軟に捉え、支援プログラムという限られた期間において実践できる支援について検討した内容を報告します。

## 2 自己理解を進めるための支援とは

高次脳機能障害者に対し、自己理解を進めるための支援技法を開発するにあたり、文献調査や専門家へのヒアリングを行い、前提となる考え方、留意点、支援方法の整理を行いました。

### (1) 自己理解の支援を行う際に、前提として持っておくべき考え方・取組

高次脳機能障害者の自己理解を進めるための支援を行う際に、前提として必要となる考え方や取組について、調査研究報告書 No. 162「高次脳機能障害者の障害理解と職業リハビリテーション支援に関する研究－自己理解の適切な捉え方と支援のあり方－（2022）」（以下「報告書 No. 162」という。）では、表 1 のようにまとめられています。また、専門家へのヒアリングからは表 2 のような意見がありました。

表 1 「自己理解」の支援を行う際に、前提として持っておくべき考え方・取組方

考え方・取組方の内容	具体例(第1次 FG、第2次 FG)
信頼関係、協働関係の構築	・気持ちに寄り添った支援により信頼関係を構築する ・問題や目標に向けて一緒に考える姿勢を持つ
支援対象者の目標達成に向けた支援	・パフォーマンスの向上や社会参加を目標にする ・ターゲット行動の解決に目を向けた支援をする
残存能力や「できるようになったこと」に焦点	・補完手段の活用によりできるようになったことが分かるようフィードバックする ・就職(復職)先に「できていること」「こうすればできる」を伝える
多角的な視点でアプローチ	・家族、医療機関、同じ障害のある仲間など支援対象者にとって重要な他者との関わりを通じて「自己理解」を深められるように、社会資源等を活用する
長期的な視点をもち支援体制を整える	・「自己理解」の支援は長期的に見ることが必要との認識を持ち、支援機関との連携を図る
支援内容や活動の記録を見える化して共有	・相談内容は紙面に書いて共有。次回相談時に、書いた内容を一緒に確認してから相談を始める

出典元：独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構 障害者職業総合センター

調査研究報告書 No. 162「高次脳機能障害者の障害理解と職業リハビリテーション支援に関する研究－自己理解の適切な捉え方と支援のあり方－」（2022）、p120 より引用

表 2 「自己理解」の支援に対する専門家からの意見

<ul style="list-style-type: none"> <li>・「気づき」とはとても深く、どこまでいっても気づきはある。周囲が気づかせることはできず、自分で気づくしかない。周囲は期待していると思うが、経験を積まないと難しく、押し付けになってはいけない。</li> <li>・「うまくいかなかったこと」と「できていること」を対として捉え、本人の目標達成に向け、できそうなところを本人自身に見つけていってもらうことが支援の目標となる。</li> <li>・(本人が、周囲の人から「自らの病気や障害を自覚してほしい」と課題を示されることについて)周囲の人から何を自覚してほしいと言われているか、本人が自らの言葉で出力してもらうことが大切であり、「自覚がないと言われている」ことを認識できているだけでもよい。</li> </ul>
---

## (2) 自己理解の支援を行う際の留意点

自己理解の支援を行う際には、支援効果だけでなくリスクについても留意しておくことが必要です。

報告書 No. 162 や専門家へのヒアリングでの意見について、表3のとおり整理しました。支援効果の限界や支援を行うことで生じる心理的リスクについて考えておく必要性等が示唆されています。

表3 留意点に関する文献調査・専門家からの意見

支援効果の限界について
<p>【報告書 No.162における所見】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ある程度の障害認識がなければ、支援効果が見られない。</li><li>・抽象的な推論能力や記憶に著しい障害がある場合は、「自己理解」を深めることは難しい可能性がある。</li><li>・訓練によりセルフモニタリングや自己調整能力の向上は一定の効果が見込めるが、練習した場面と類似性の低い課題への般化はエビデンスが十分でない。</li><li>・問題や課題を事前に予測し対処するという理解ができるようになるためには、一定のメタ認知的知識（長期記憶に保存されている理解）が必要である。</li></ul>
<p>【専門家からの意見】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・理解力が高い方だと教材を用いた心理教育が有効な場合があるが、困っている実感が無い方は、本人が困るのを待つことが必要な場合がある。</li></ul>
心理的リスクについて
<p>【報告書 No.162における所見】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・障害の否認が要因として考えられる場合、「自己理解」の深化に焦点をあてる教育的支援が、敵意や怒り、防衛反応を引き起こす可能性がある。</li><li>・「自己理解」が深まることで抑うつ、不安をもたらす可能性がある。</li></ul>
<p>【専門家からの意見】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・自己への気づきに焦点をあてると、心理的抑制が効かなくなり周囲を巻き込む又は抑うつをもたらす可能性があるため、気づきの支援を無理に行わず、別の視点に目を向けて支援を行うこともある。</li><li>・周囲がどう自分のことを評価しているか不安があり、自己の特性が分かっても、あえて効果的な対処方法を取り入れない人もいる。</li></ul>

## (3) 支援方法について

自己理解の支援方法については、報告書 No. 162 で述べられている選択する支援方法の例や専門家へのヒアリングでの意見について、表4のとおり整理しました。高次脳機能障害者の状況に応じて、自己理解の深化に焦点をあてた支援だけでなく、自己理解の深化に焦点をあてない支援も検討し、選択や併用していくことによって、長期的、総合的に自己理解を進めていくことの必要性が示唆されています。

表4 文献調査・専門家からの意見で挙げた支援方法の例

自己理解の深化に焦点をあてた支援の例
<p>【報告書 No.162 における所見】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日常的(職業的)な場面に即した課題や状況の中で直接的にフィードバックする。</li> <li>・障害や補完手段に関する心理教育を行い、実際の場面で起きていることと障害とを結びつける。</li> <li>・対象者が課題実行中にセルフモニタリング・自己調整できるよう課題設定やフィードバックを行う。</li> </ul>
<p>【専門家からの意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・準備の段階では気づきが生まれにくい、復職や就労後に、様々なことに気づいていく人が多い。</li> <li>・受障前と現在との変化を感じる経験が気づきになり、セルフ・アウェアネス(自己認識)を進める動機づけとなることはある。</li> </ul>
自己理解の深化以外に焦点をあてた支援の例
<p>【報告書 No.162 における所見】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・習慣化形成に重点を置く。</li> <li>・心理的側面を考慮する。</li> <li>・支援等への動機を高めるアプローチを行う。</li> <li>・環境・周囲のネットワークへのアプローチを行う。</li> </ul>
<p>【専門家からの意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・客観的データを動機づけに役立てて目標設定を行う。</li> <li>・気持ちの波がある場合等、トラブル時に支援が途切れないように、支援者を限定せず地域で多角的な支援を検討する。</li> <li>・周囲からの期待や、自分がどうありたいかについて、本人自らが言葉で出力し、出力できたことに対し肯定する。</li> <li>・環境調整は重要な要素。自己理解に課題があっても職場で定着している事例もある。</li> <li>・職場の環境を確認し、受入れ側の環境(受け入れる土壌)を作っていくことが大切であり、そのための支援を考える。</li> </ul>

### 3 開発の目的

以上のように、文献調査や専門家の意見から、「自己理解を進める」ための支援を行うにあたっては、自己理解の程度や心理的リスクを考え、自己理解の深化に焦点をあてた支援とそれ以外の支援を選択したり、併用する必要性が示されています。

今回の技法開発では、自己理解を進めるために、本人が①就職や復職等の目標達成に向けて、自己の特性、求められる職務や働き方等についての知識を得ること、②自ら主体的に職務遂行に必要な補完手段を活用すること、③力を発揮しやすい作業環境を知るための体験をすること等が可能な場面を活用して、様々なアプローチを試行しました。

これら①～③の場面に沿って、試行した内容について、以下の章で説明します。

① 就職や復職等の目標達成に向けて、自己の特性、求められる職務や働き方等についての知識を得ること	⇒	第2章及び第4章
② 自ら主体的に職務遂行に必要な補完手段を活用すること	⇒	第3章
③ 力を発揮しやすい作業環境を知るための体験をすること	⇒	第3章

## 4 用語の定義

### (1) 高次脳機能障害

「高次脳機能障害」は、病気や怪我で脳に損傷を受けたことにより生じる認知機能の障害に関する言葉ですが、用いられる文脈により、主として「注意障害」「記憶障害」「遂行機能障害」及び「社会的行動障害」を指す場合と、「失語症」「失行症」「失認症」等を含め広く捉える場合があります。

職業センターで実施するプログラムにおいては後者の意味で捉えています。

### (2) 記憶障害

記憶の定義は様々で記憶障害の定義も一律ではありません。職業センターのプログラムでは、前向き健忘（受障以降、新しいことを覚えにくい状態）の日常生活の中で記憶に関する問題を総合的に捉えた日常記憶（everyday memory）について、対処方法を検討しています。

### (3) 注意障害

注意の定義も様々で注意障害も様々な分類方法や定義がありますが、職業センターのプログラムでは、主に全般性注意を取り上げ、「持続性注意」「選択性注意」「分配性注意」「転換性注意」の4つの機能に整理して注意の特性を個別に捉えています。

### (4) 補完手段

「受障によって低下した認知機能を補うための道具の使用」「注意を喚起しやすくする、記憶を想起しやすくするための環境の調整」「認知機能の低下によるミスを予防するための日課や作業の手順等の確立」を表す言葉として、「代償手段」や「対処手段」等が、ほぼ同意味で使用されることがあります。

## 【引用文献】

障害者職業総合センター：調査研究報告書 No.162 「高次脳機能障害者の障害理解と職業リハビリテーション支援に関する研究－自己理解の適切な捉え方と支援のあり方」(2022)、p.120-123